

## 前史 「蛮書和解御用」から東京外国語学校へ

### 一 「東京外国語大学の起源Ⅱ貞享元年 天文方」説について

これまで、東京外国語大学の起源は江戸時代の天文方てんもんかたに置かれていた。そのため、学生便覧や大学紹介の冊子に載せられた大学沿革略図は、「貞享元年 天文方」から始められていた。ところが、大学史編纂過程で従来の見方を変更することになり、本学の起源は、「蕃書調所ばんしょじょうしよ」とすることがふさわしいものと確認された。そのため、一九九七年度の「東京外国語大学概要」より、「文化八年（一八一二）蛮書和解御用ばんしょくわいごよう（天文方 貞享元年「二六八四」附設）から「蕃書調所」までは破線で結ばれるようになった。はじめに、こうした変更を行った理由について説明しておきたい。

天文方は、本来暦を作ることが任務である幕府の役職である。その編暦・改暦事業のために天文方の役人が勤務した場所が天文台であった。ところが、北方ロシアからの脅威により外国語研究が必要とされるに至り、一八一一年に浅草の天文台の中に、外国語の翻訳事業を行う目的で設けられ、天文方の高橋作左衛門景保たけはしりょうへいが管理した部局が、蛮書和解御用だったのである。したがって、外国語研究機関としての側面からみると、本学は蛮書和解御用の系譜上に位置づけられる。

しかし、大学とは教育・研究機関である。こうした性格に鑑みると、研究ばかりでなく、学生を入学させ、教育カリキュラムを持つ教育機関としての性格を明確にもつ組織こそが、東京外国語大学の前身として理解することがふさわしいものと考ええる。その組織とは、一八五七（安政四）年正月十八日に開校した「蕃書調所」（のちに開成所かいせいじょと改称）であった。

なお、「蛮書和解御用」という用語であるが、江戸時代においても「蕃書和解御用」や、「阿蘭陀書籍和解之御用」等さまざまな呼称で呼ばれていたといわれている（沼田次郎「蛮書和解御用と蕃書和解御用」「歴史と地理」二八九号、一九七九年）。しかし、「安政六己未年調 天文方代々記」（大崎正次編『天文方関係史料』一九七一年所収）では「蛮書」という語は一八五五（安政二）年十二月頃から使われ始め、それまでは「蘭書和解御用」と記されている。これは、「蛮書」あるいは「蕃書」という外国に対する「夷狄」觀念に基づく表現が、攘夷思想の高まりとともに強く現れてきたものであることを示している興味深い。そこで、以下においては「天文方代々記」の用法に従い、一八一一年設立当初は「蘭書和解御用」と表記する。

## 二 江戸時代における外国語需要

### 「鎖国」体制下の外国語需要

江戸時代は、いわゆる「鎖国」という体制をとっていた。「鎖国」といっても、完全に国を閉ざしていたわけではなく、異国（外国）と接する場所を限定し、幕府がそれらを直接的、間接的に管理・統制する体制を「鎖国」と表現するにすぎない。すなわち、オランダと中国との接点となる幕府直轄の貿易都市長崎と、朝鮮との窓口となる対馬藩、